

2017年8月20日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：詩編 51：1-19

タイトル：『ダビデの祈り』

本日の聖書箇所は詩編51編です。ここにはダビデの悔い改めの祈りが記されています。それで一般的に、「悔い改めの歌(詩編)」と呼ばれています。また同じ詩編の中には、他にも6、32、38、(51)、102、130、143の7つの「悔い改めの歌(詩編)」が記されています。その中でもこの51編は、特にダビデが自分の心の奥底までも全て見つめ直して、心からの悔い改めを神様に吐露しています。

この真摯なダビデの悔い改めの歌、つまりダビデの祈りから、私達も『信仰者の真の悔い改めの祈り』ということ、今日は、主に3つに分けて考えていきたいと思えます。

さて、この詩編51編の背景が、第2サムエル11-12章に詳しく記されていますが、ダビデという人物を改めて知るためには、もっと前に戻り、彼がどのような人物であったのかを確認したいと思います。

一般的にダビデという人物は、聖書の中でイスラエルの偉大な王として、またお手本のような素晴らしい信仰者として多く記されています。ダビデが初めて登場したのは、エッサイの7人息子の末っ子として登場しました。そしてダビデはこの時、父エッサイの羊を飼う、羊飼(牧童)でした。その後のダビデは、イスラエルの初代王であるサウル王が率いるイスラエル軍と戦ったペリシテ軍のゴリアテという巨人を倒したことにより、その功績が認められて、サウル王の家来となりました。ダビデは羊飼いかから軍人へと、ある意味昇格しました。そしてそれ以後、ダビデは、サウル王とイスラエルに忠実に仕え、近隣の敵と戦う時は、いつも大きな勝利を収めました。何よりそれは、ダビデが神様を恐れ、神様を信じて、いつも神様により頼んで戦いを行っていたので、神様がそのダビデを祝福し、全ての敵からダビデを守り、また勝利をも与えてくださったのです。

一方、王であるサウルは、ダビデの勝利をはじめは喜んでいましたが、ダビデの名がイスラエルの中で次第に、自分よりも大きくなって行ったことに、嫉妬して、ついには憎悪となり、忠実に仕えていたダビデを殺そうと、執拗に追い掛け回すようになりました。嫉妬というのは本当に恐ろしいものです。

そこでダビデは、仕方なく家族から離れ、家を失い、食べ物にも困りながら、洞窟や時には敵の陣地、また気が狂った振る舞いなどをしながら、なんとか難を逃れて生活する非常に厳しい流浪の日々を送るようになりました。しかしダビデは、こんな理不尽なことがあっても、王であるサウルには歯向かわずに、決して神の前に罪を犯すことをしませんでした。

詩編の中には、ダビデのこの流浪の時期の苦しみを歌ったものが多く記されています。そしてそこを讀めば、ダビデがどれほど苦しく、また厳しい状況にあったのかを知ることが出来ます。そしてそこには、ダビデの神に対する篤い信仰を讀み取ることが出来ます。ダビデはどんな時も神を捨てることはなく、ただ神により頼んでいたのです。ダビデは神と共歩むことがどれほど素晴らしいことなのかを本当に良く解っていたのです。まさにお手本のような素晴らしい信仰です。

けれども、そんな素晴らしい信仰者ダビデでしたが、サウル王が敵国との戦いで戦死して、ダビデが次のイスラエルの王となり、そして近隣のすべての敵国からことごとく連戦連勝と勝利を収めて行った時に、ダビデの心はいつの間にか高ぶり、まるで自分の力で戦いに勝利したかのように思うようになって

たのです。そしてその時に、今日のこの詩編の51編の表題に記されているバテ・シェバという女性と不倫関係に陥り、さらにはこのバテ・シェバがダビデによって妊娠したので、それらのことが夫であり、またダビデにとっては自分の部下でもあったウリヤに、バレないように！彼を戦いの中で戦死させる計画を立て、実際に殺害させたのです。

どんな時も神により頼んでいた信仰者ダビデの姿からは、とても考えられないような、物凄く恐ろしいことを、ダビデは自分の罪をひた隠しにするために計画し、そして王という権威を濫用して、それを実行したのです。この時、ダビデは何とかしたかった自分の罪の問題を、これで一時的には解決した形になったかもしれません。そしてうまく隠せたと思ったかもしれません。しかしこのことは、神の前には当然すべてが明らかでした。そしてダビデがこれまで築いてきた神との信仰による豊かな信頼関係にも、ひびが入り、ダビデは「主の御心をそこなった（2サム11：27）」のです。

それゆえ神は、ダビデのこの罪を指摘し、さばきを宣告するために預言者ナタンを、ダビデのもとに遣わしました。そしてその事実をナタンはダビデにことごとく告げたのです。ダビデにとっては、ウリヤを殺してまでも隠したはずの罪でしたが、ナタンによって明らかになったため、もしかするとダビデは、王として再び権力を濫用し、ナタンにもウリヤと同じように、何らかの理由をつけて殺すことも出来たのです。

ナタンは当然、王に対するそうした恐れを持っていただでしょうから、その恐れを懸命に払いのけながら、主の預言者として、『語らなければならないことを語った』のです。ナタンにとってもまさに命がけで王の前に出て語ったのです。これは、今も生きて働いておられるまことの神の言葉を伝える預言者としての使命です。『神が語っている！それゆえに我、語る！』という、揺るがない信仰によってナタンはこのことを実行しました。これこそが神のことばを伝える真の信仰者の姿です。そして今日、それが私達クリスチャンです。生きて働いておられる神のことばを伝える使命が私達には託されています。

さて、こうしてナタンによって、ダビデはその過ちを告げられたのですが、ダビデは激情してナタンを殺害するのではなく、直ちに、すぐに、主の前にへりくだりました。その時のことが2サムエル12：13に記されています。「ダビデはナタンに言った。「私は主に対して罪を犯した」

こうしてダビデは、心からの悔い改めの祈りをささげました。それが、この詩編の51編の祈りです。前置きが長くなりました。

では改めて51編に目を向け、3つのことを考えたいと思います。

1. 「罪の赦しへの嘆願」

ダビデはまずはじめに「神よ！」と、それまでいつのまにか高ぶり目を背けていた「神」に対して、再びはっきりと目を向けました。神に目を向けるということは、これは分かっている、実はなかなか出来ないことです。しかしダビデはこの時、神の前に出て、神を見つめたのです。悔い改める時には、まず初めにこのことがしっかりできなければなりません。なぜなら、この「神の方を向く」ということが出来なければ、形式的には悔い改めの形をすることが出来たとしても、結局、心からの悔い改めは出来ないからです。

次にダビデは、「御恵みによって…情けを掛け」と祈りました。「御恵み」という言葉は、契約に関する言葉です。ですから、ダビデは、自分に与えられた神との契約（王座の確立）を思い返しているのだ

と思います。さらに「情けをかけ」と祈りました。これは「慈しんでください」という意味の言葉です。罪を認めてへりくだった者が、『自分は全く何かのご好意に与れるような、そういった御好意を要求する権利さえもまったく持っていない者です。』という者が使う言葉です。ちょうど新約聖書のなかの放蕩息子の例え話のなかの、「私はあなたの子と呼ばれる資格の無い者です。」と告白し、父である神に「慈しんでください・情けを掛けて」ください。という場面の言葉と同じ意味です。

ダビデはこの冒頭で、「神よ！」と、神に目を向け、そして『自分は神であるあなたにとこしえの契約を与えられた者ですが、その御好意に与ることなどとてもできないおろかな者です。』という意志を持って、神の御前に進み出たのです。

そしてダビデはこの後、自らの「罪」をことごとく告白するために、「罪」という言葉を祈りの中で9回、原文では「咎」という言葉も「罪」という言葉でもあるので、なんと11回も繰り返して言っています。また初めの3節までの間に、ダビデは「私の罪」または「私のそむきの罪」「私の咎」と、他の誰かではなく、「私の罪・私の咎」と、「私の」という言葉を6回告白しています。

またダビデは、その罪を「ぬぐい去ってください」と祈りました。この言葉は、別の意味で「消し去る・抹消する」という意味の言葉です。それは書物などに書かれた文字を消すように「ぬぐい去る」または「消してください」という言葉です。

2節では、「私の咎を私から全く洗い去り」と祈っています。7節でも同じように「私を洗ってください」と、「洗う」という言葉を繰り返しています。これは文字通り「洗濯」を意味する言葉です。通常洗濯をするというのは、汚れた時、または臭くなった時などです。つまりダビデは「私の咎を全く洗い去り…」 「…洗ってください」というのは、まるで自分の罪と咎が、汚れや悪臭であるかのように、そして何度洗っても落ちない染みのようなものでもあるかのように、「全く洗い去り…」と、自らの罪に心から嘆き、主に祈っているのです。そうしてその汚れと悪臭を放つ自らの罪を、ダビデは4節でさらにはっきりと「私はあなたに、ただあなたに罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。・・・」と、全く言い逃れをしないで、自らの汚れと悪臭のその罪をはっきりと告白したのです。さらに続けて4節の後半で、「あなたが宣告される時あなたは正しい。」と、神のすべての裁きを私は受け止めます。受け入れます。という告白の祈りも捧げました。それはまるでまな板の上の鯉のように、ダビデは神の前に徹底して自らの罪を認め、さらに全てのさばきも受け入れるという、心からの悔い改めを表したのです。

Iヨハ 4:18にはこのように記されています。

「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。」

ダビデは、自らの罪を徹底的に認めて、神のどんなさばきも受け止めます！という悔い改めの告白の中で、神への愛を改めて明らかにしたのです。これこそが信仰者としての真の悔い改めではないでしょうか。

さて、さらにダビデはそれだけではなく、5節で「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。」と言っています。これは『自分はどうせ生まれる前から罪人なんだから、罪を犯すなんて仕方ないことじゃないか。』という開き直りの意味で言っているのではありません。ダビデは、自分が生まれる前から罪を犯してしまうという定めの中にいる、そんな自分を嘆いて、そこまで(生まれる前にまで)戻って、自分のすべての罪を悔いて、改めている。ということです。ダビ

デはそのよう、徹底的に神の前に悔い改めようとしたのです。

このようにしてダビデは、自分の罪から漂い、漏れ、溢れ出てくるような悪臭と、汚れに、自分では洗い流すこともぬぐい去ることも、どうすることもできない、自らの罪深さとその重さに、どうか全てを洗い去ってください!!と、神に向かって、心から徹底的に悔い改めたのです。

そしてダビデはさらに徹底して、この悔い改めは、今自分が出来る心からの真実です!と、6節に記されているように、「ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。・・・」と告白し、また17節でも同じように、「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」と、徹底して神の前に自らの真実を告白しているということを、ダビデは神の前に祈ったのです。これがダビデの「罪の赦しへの嘆願」ということです。

2. 「救いへの嘆願」

ダビデは、汚れと悪臭を放つ、どうすることもできない自らの罪をことごとく認めました。それゆえ「ぬぐい去ってください」「洗ってください」と、唯一罪をぬぐい去り、洗うことが出来る神に願い求めました。そしてダビデはさらに「きよめてください」「きよい心を造ってください」と、何度も「きよめ」られることを願い祈りました。

この「きよめ」とは、祭司が儀式の締めくくりとして、身体と衣服を洗うことを指す言葉でもあります。つまりここでも、汚れと悪臭をことごとく洗って取り除くことを「きよめ」と意味しています。ダビデは、徹底した罪の告白と同様に、この汚れと悪臭の罪が徹底的にぬぐい去られ、洗われ、そしてことごとくきよめられることを切望しました。それは、この罪が取り去られない限り、いつも自分の前にあって、そして汚れと悪臭の漂うその罪によって、苦しめ続けられるということを、このバテ・シェバ事件の中で本当に深く味わっていた!!ということだったのでしょう。ですから、罪の汚れと悪臭が染みついた衣服も、また身体もすべて「きよめ」てください!!と祈ったのです。

7節では、この「きよめ」という言葉が2度続けて出てきます。そしてダビデはこの7節前半で、「ヒソプをもって罪を除いてきよめてください。」と告白しています。この「ヒソプ」とは、ラベンダーの様な見た目の植物で、葉をちぎると非常に良い安らぎと癒しの香りを出すと言われていています。それで葉をちぎられ、自らが傷つけられることで安らぎと癒しの香りを放つということが、非常に象徴的な植物として、聖書でも用いられています。言うなれば「贖い」です。ダビデは、自分では取り去ることのできない汚れと悪臭の罪をきよめられるだけではなく、ヒソプをもって贖って欲しいと、神に「贖い」を願っているのです。まさに「救いへの懇願」です。そうして続く7節後半で、「そうすれば私は雪よりも白くなりましょう」と、心からきよめられ、贖われ、救われることを願ったのです。

またダビデは10節で、「きよい心を造り、揺るがない霊を新しくしてください。」とも告白しています。この「造る」という言葉は、神が天地を創造したときの「創造」という意味の言葉です。また「新しくしてください」とは、「新しい国を造る」という時に使われる言葉です。つまりダビデは、ここでも徹底的に『今までの自分ではなく、新しく創造され、新しく建て上げてもらわなければ、自分は決して罪の汚れから解放されてきよめられることは出来ないのだ。』と、自らに過信することなく、何度も何度も徹底して罪からきよめられ、そして救われ、新しく創造され、新しく建て上がっていくことを神に懇願したのです。ダビデは徹底して「罪の赦しの嘆願」と共に、「救いへの嘆願」をしたのです。

しかしこれらすべては、単に自分の罪と、その罪責感を消すためということではなく、本当のダビデの目的は、もう一度神との素晴らしい関係であった真の礼拝者となる！ということでした。それが最後の3番目の「礼拝者への嘆願」ということです。

3. 「礼拝者への嘆願」

ダビデは続く11-12節で「私をあなたの御前から投げ捨てずに、あなたの聖霊を私から取り去らないでください。……」と告白しています。つまりダビデは、神との交わりの回復を求めているのです。神によって救われたいというのは、自分の身の安全を求めることが第一ではありません。それは何よりきよい神との交わりの回復を願うことでありました。なぜなら神こそは、本当の喜びと平安と楽しみと愛と平和が満ち溢れているお方だからです。

ダビデはこのバテ・シェバ事件でとんでもない罪を犯しましたが、彼はこれまでのその篤い信仰から、神との交わりがいかに素晴らしいものであるのか。ということをよく解っていました。それゆえ、この神との交わりこそが、本当の喜びであり、また楽しみであるということです。ですからダビデは13、14、15節で「あなたの道を教える、あなたの義を高らかに歌う、あなたの誉れをつげる」と、それまで「私の罪」、「私の」救いということから、「あなたの道」「あなたの義」「あなたの誉れ」と、神を心からほめたたえる礼拝者になることへと、祈りが変えられているのです。そして最後の18-19節では、国家として、神に向かって礼拝することを祈っています。ダビデはここで、個人の祈りから、王として国民のために祈ったのです。救われた者が何よりも喜びと楽しみである真の礼拝者になるということ、その神との交わりの回復を求めて、ダビデはこの詩編51編の最後に祈りました。これこそがダビデが祈った詩編51編の祈りだったと言えるのではないのでしょうか。

さて最後に付け食えさせていただくなら、ダビデは一体何ゆえに、ここまで、言うなれば過剰にとも言えるほどの徹底的な罪の悔い改めと救いを求めたのでしょうか。

それは不倫と殺害というあまりにも大きな罪だったからでしょうか。いいえ、そうではないはずです。私達が神というお方を見上げた時に、自分の中にあるどんな小さな罪も隠すことはできません。なぜなら神はまったく聖いお方だからです。神は私達のどんなに小さな罪も見逃すことはありません。

Iヨハ1：5-9にはこのように記されています。

「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると言っていながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

神のうちには暗いところが少しもないのです。ですから、この聖い神と交わるためには、やはり私達はどんな小さな罪も隠して交わることが出来ないのです。私達はこのことに一体どれだけ心砕き、日々悔い改めを捧げているのでしょうか。ダビデのように、徹底して心砕いた祈りとなっているのでしょうか。神は何よりもそのことを求めています。ダビデはそのことを知っていたので徹底したのです。

二つ目は、自分では自分の汚れて悪臭漂う罪を聖めることが出来ないので、私達にもヒソプとい贖いが必要である。ということです。それこそがイエス様です!! 1ヨハネ2：1には「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私達には、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。」と記されています。

イエス様は、自分ではどうすることもできなくなった私達の罪を、御自分の体を痛めること(十字架により)で安らぎの香り、癒しの香りを与えてくださったのです。まさに2コリント5：17の「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」ということなのです!!

こうして私達はいつでも主との交わりの中にきよめられて、戻る事が出来るのです。この恵みを心から感謝したいと思います。

アーメン